

「双子」の使命

大学共同利用機関を母体とする総合研究大学院大学（総研大）の学長としてはいささか恥ずかしいことかも知れない。国立教育政策研究所の徳永保所長から、思いも及ばなかったことを最近教えていただいた。それは分子研の設立と密接に関わることである。分子研が「分子科学とも称すべき新しい総合的な学問分野を構築する」ために設立された経緯は、分子研レターズ57（May 2008）にある長倉三郎先生の講演記録に詳しい。分子化学ではなく「分子科学」であることに強い思いが込められている。

このような分子研の設立には、日本学術会議の勧告が重要な役割を果たした。私が全く予期していなかったことは、勧告では分子研の設立と大学院の設置が「双子」として構想されていたことである。しかも、この大学院は博士課程を主体としていた。実際には、制度的な問題のためか、分子研と総研大は双子としては誕生しなかった。そのため、1984年にはすでに設立されていた分子研やその他の大学共同利用機関を母体とした大学院の設置に関する答申が、改めて学術審議会からだされている。そしてこれを受けるかたちで大学院問題の検討が直ちに進み、まもなく大学共同利用機関を基盤とする総研大が誕生した。このような経緯もあって、大学共同利用機関と総研大の制度的な関係は、双子の兄弟というよりは親子となった。

ところで、昨年、科学技術・学術審議会からだされた「大学共同利用機関法人及び大学共同利用機関の今後の在り方について」（審議報告書）では、「総研大との連携の意義や在り方等につい

て、今後、改めて検討することが必要である」と指摘されている。いま、研究と教育を一体化した分子研の当初構想を想いつつ、この指摘を再び考えている。すぐに思うことは、親子関係にあるとはいえ、いやそれだからこそ、理念や使命にはいくつかの共通点があることだ。分子研にしる、総研大にしる、目標のひとつは新しい学問分野の形成である。また、そのための有力な方法が、既存諸分野の総合化であることも共通に認識してきた。

総合化のハードルは決して低くない。学問の細分化や専門化が進み、全体の把握がますます難しくなっている。分子科学の領域内でもそうかも知れない。いわんや、文系と理系となると両者は接点のない、異なる世界のように感じる人も多い。異分野を理解する必要性については数々の指摘があるが、実行できる人は多くない。閉じた専門分野で染み付いた狭量さのためであろう。しかし、医者であり、物理化学者であり、哲学者でもあったMボラニーのような人がいる。自然の研究と人間の研究の間の不連続性を一切否認するために、「個人的知識」理論を展開した人でもある。私はこの主張を信じる。そして、総合化は個人的な知識として実現できる部分も少なくないと思う。分子研と総研大は制度的にも主機能においても異なるが、総合化による新しい学問分野の創造という点ではやはり双子であり、使命を共有している。この使命は、佐藤勝彦機構長が分子研レターズ63（Feb. 2011）の巻頭言で期待されたことに他ならない。

高畑 尚之

総合研究大学院大学 学長



たかはた・なおゆき

昭和46年3月京大理化学卒、昭和48年3月京大理学部修士課程卒、昭和52年3月九大理学研究科博士課程単位取得退学、理学博士（昭和52年4月）、昭和52年4月国立遺伝学研究所助手、昭和61年8月助教授、平成4年3月総合研究大学院大学教授、平成13年4月副学長、平成20年4月より現職。理論集団遺伝学の研究に関して昭和61年度日本遺伝学会奨励賞、平成14年米国科学芸術アカデミー外国人名誉会員、平成15年度日本遺伝学会木原賞、平成18年度日本進化学会木村賞を受賞。また、平成15年度のThe Society for Molecular Biology and Evolutionの会長、平成2年-11年Max-Planck生物学研究所国際評価委員会会員、平成11年以来理研バイオリソースセンターアドバイザー・カウンセラー委員。